【第4章】
健康福祉課として取り組んでいくこと

今までの健康づくり活動を振り返る中で見えてきたもの

今までの健康づくり活動を振り返ってみると、1940年代の健康づくりは病気に対する情報が不足していたため、専門的な知識や情報を伝えていくことが大切だとされてきました。1970年代になると、病気にならないことや健診などで異常がないことが大切だとされてきました。清音村でも、このような健康づくり活動を実施し、一定の効果を挙げました。ところが、こうした健康づくり活動は専門家による一方的なサービスの提供になりがちでした。

しかし、時代の変化や価値観の多様化に伴って、今までの健康づくり活動では住民のみなさんが考える健康のとらえ方に対応しきれない部分がでてきました。「今までのような健康づくり活動をしていていいのだろうか？」「今の健康づくり活動は、本当に住民のみなさんのための活動になっているのだろうか？」といった疑問が生まれ、これからの健康づくり活動について改めて考える必要があると感じました。

そして、「健康とは何か」「どんな健康づくり活動が必要なのか」を職員同士でしっかりと話し合う中で、今までは「健康」を「病気がないこと」といった身体的な面だけでとらえていましたが、今後は生きがいを持ち、安心して暮らすことのできる生活すべてを踏まえた「暮らしのありようそのもの」として考えることが必要だと気づきました。

このことは、第2章にも書いてあるように住民と行政がともに取り組んでいくなかで実感することができました。

これから健康福祉課として取り組んでいくこと

第２章・第３章を通じて、「生きがいや喜びを感じる暮らし」の理想の姿をめざして、住民と行政がお互いに役割を果たし、取り組んでいくことがこれからの健康福祉課として取り組むべき活動だと考えました。

「生きがいや喜びを感じる暮らし」の理想の姿とは、病気や障害があったとしても、家族や地域、社会の中で安心して自分らしくいきいきと暮らせることだと思います。この暮らしを実現していくためには、支えあう仲間づくりや生活環境を整えていくことが必要です。それは、「人づくり・地域づくり」を基盤として、住民と行政が一緒に理想の姿を描き、その実現に向けて取り組んでいくことでできると考えます。

そして、お互いを認め合い、お互いを思いやることで、住民の持っている力を引き出すことができると感じました。また、住民の持っている力が引き出されることと合わせて、行政の持っている力も引き出されていくと感じました。このようにお互いの力を引き出しあい、発揮しあうことで「人づくり・地域づくり」がすすんでいくと感じました。

また、「人づくり・地域づくり」を基盤にして健康福祉課の業務を行うことで、住民の描く「生きがいや喜びを感じる暮らし」の理想の姿を実現できると考えます。そのために、現在行っている業務のあり方を見直すことが必要だと感じました。

第２章の「『子ども』『働き盛り』『高齢者』のつながりをみてみよう」でも述べているように、１つの世代の理想の姿を実現するためには、他の世代が深く関わっています。例えば、子どもの理想の姿を実現していくためには、働き盛りや高齢者の関わりなしでは実現できません。その視点を持って健康福祉課で行っている業務を見直してみると、子どもを対象とする業務にも、働き盛りの業務や高齢者の業務がつながってきます。そのため、現在実施している事業を再度見直し、つながりを考え取り組んでいくことが大切だと感じました。

また、健康福祉課の業務だけではなく、他の課や他の団体とのつながりも必要になってきます。そのため、他の課や他の団体と一緒に力を引き出し、発揮しあえる取り組みをしていこうと考えます。

「人づくり・地域づくり」は一朝一夕にできるものではなく、時間がかかります。しかし、住民と行政が支えあいながら一歩ずつすすんでいくことで、「生きがいや喜びを感じる暮らし」を実現でき、「これからも住み続けたいと思える清音村」を実現していくことができると考えます。